



4 石川光明 いしかわみつあき 明治二十三年帝室技芸員任命
《古代鷹狩置物》一点

明治三十二年（一八九九）

牙彫

一一・七×二二・〇×四二・一

狩りのために飛び立つ鷹を今にも放そうとする鷹匠の姿をとらえた作品で、高村光雲とともに明治彫刻界に君臨した石川光明（一八五二～一九一三）の牙彫の代表作である。体躯の均整のとれた鷹匠の姿は光明の人物表現では他の作例に比しても写実性が強く示されており、その厳しい表情等、人物の内面性をも彫り表そうとしたところに、西洋の彫刻表現へ近づこうとした傾向がみてとれる。象牙の丸彫りを基本に左肩で別材を接いでいる。装束や鷹、鷹匠が身につけた道具類など細部を見るほどに、その優れた彫技に魅せられる作品である。

この主題は光明自らが考案したもので、『巴里萬国大博覧会出品録』によれば最初の構想の段階で、光明は宮内省に作品の表と裏の二方向から描いた図面を提出していたようである。明治三十年十月二十九日付の仕様書には「雛形及ヒ原品彫刻料」とあり、本制作にあたり、他に雛形も制作したことが知られる。鷹匠の装束は「桓武天皇ノ頃」の狩衣であり、腰に取り付けられた籠の鳥は雉子で、鷹の餌として与えるものという。鷹狩りは古くより貴紳に親しまれ、明治期には宮内省は式部職のもとに鷹匠を雇い育成していたこともあり、光明は御下命制作にあたり、皇室にゆかりの深いこの主題を選んだものと考えられる。

日	月	年	時	番
要	摘	目	品	號
佛國博覧會 口日返納	高き尺貳寸五分 紫檀櫃 其有三十三年 四月	狩ノ圖 象牙彫置物	高き尺貳寸五分 紫檀櫃 其有三十三年 四月	第拾貳号
名	人	納	價	代
石川	光明		金千五百円	
		數	員	
		壹	個	

旧外箱に貼られていた整理票。博覧会終了後の明治34年4月24日に宮内省へ作品が返納されたことを記す。



台座背面部刻銘



背面

光明は嘉永五年（一八五二）に浅草の宮彫大工の家に生まれ、家業の木彫を学ぶかたわら、狩野素川に絵を学び、その後根付師菊川正光について牙彫を修めた。皇居造営の折には室内装飾の彫刻を担当し、明治二十三年には東京美術学校雇となり同年に帝室技芸員に任命された。木彫と牙彫とも多くの優れた作品を制作しており、明治初期以降、牙彫の海外への輸出が隆盛を極めた時代に牙彫界で第一人者として重きをなした。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections